

令和５年度第１回ピースツーリズム推進懇談会 会議要旨

１ 開催日時

令和５年９月８日（金）１０時００分から１２時２０分

２ 会場

広島市中区地域福祉センター５階 大会議室１・２

３ 出席者

懇談会構成員

団 体 名 ・ 役 職	氏 名
被爆体験証言者（平和記念資料館元館長、元国際平和担当理事）	原田 浩【座長】
広島県原爆被害者団体協議会 事務局長	前田 耕一郎
広島市立大学広島平和研究所 所長	大芝 亮
広島大学平和センター 准教授	ファン デル ドゥース 瑠璃
特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima 理事長	渡部 朋子
一般社団法人ひろしま通訳・ガイド協会 会長	畝崎 雅子
広島市市民局国際平和推進部 部長	山藤 貞浩
広島市経済観光局観光政策部 部長	中田 忠

（計８名、欠席１名）

事務局

広島市経済観光局観光政策部 観光プロモーション担当課長、課長補佐、主査、主事 （計４名）

４ 議題

- (1) 令和５年度上期の取組
- (2) 令和５年度下期の取組（予定）
- (3) その他平和に関わる本市の事業についての情報共有

５ 公開・非公開の別

公開

６ 傍聴人の人数

０名

７ 会議資料名

資料 ピースツーリズム推進懇談会（令和５年度第１回）

８ 発言の要旨

【令和５年度上期の取組、令和５年度下期の取組（予定）について事務局から説明】

（前田委員）

G 7 広島サミットに参加したメディア関係者から広島ピースツーリズムのサイトにどの程度アクセスがあったか分かれば教えてほしい。また、ジャーナリスト研修の参加者は各々の媒体でどのように報道したのか教えてほしい。

(事務局)

全体の数値は分かるが、メディア関係者に限ったアクセス数については、分からない。ただし、5月のアクセス数について、通常は1日300件前後であるが、G7広島サミット開催前日の5月18日は約600件、開催中の19日は約1,200件、20日は約700件、21日は約1,400件、開催後の22日は約900件となっており、軒並みアクセス数が増加している。G7広島サミットの開催に伴って広島への関心が高まりアクセス数が増えているということはあると思うが、国際メディアセンターでの情報発信もアクセス数の増加に繋がったのではないかと受け止めている。

ジャーナリスト研修について、ピースツーリズムを取り上げた記事は現時点で確認できていない。

(畠崎委員)

特に関心を持ったのが広島フィルム・コミッションのパネル展示と映画上映についてである。参加者が45名というのは決して多い数字ではないが、「8時15分 ヒロシマ 父から娘へ」と「この世界の片隅に」の2作品を見ていただいたというのは大変意義深いことだと思う。

そこで提案だが、毎年10～20名のジャーナリストや若手の研究者を公募して、渡航費用は出さなくても、海外から来てもらい2泊3日のプログラムを提供する。その中で、被爆者の方との交流の機会、被爆樹木を巡る機会、先ほど紹介のあった映像を見てもらう機会を提供する。こちらが是非広島で発信したいという内容を2日間のプログラムにして、参加者には必ず何らかの情報発信をしてもらうということを最低5年間は定期的に続けて実施するのはどうか。一般大衆の方を対象としたインスタグラム等の取組もあると思うが、私は、ジャーナリストと若手研究者の方に広島のことを深掘りしてもらう機会を、このピースツーリズムのプラットフォームが提案できるのではないと思う。

(大芝委員)

ピースツーリズムに関して様々な活動をしていることが分かった。平和記念資料館は行列ができるほど入館者が増えており、G7広島サミットの効果は大変大きいものがあつた。新型コロナウイルスの感染状況が以前と比べて落ち着いており、動きやすい状態になったことも要因であると思う。そこで、これだけの関心に対してこれからどうやって応えるのかということが課題である。

先ほど畠崎委員が言われ、瑠璃委員もよく言われる深掘りと、裾野を広げるという2つの軸が必要だと思う。深掘りについては、ジャーナリストと若手の研究者にお願いしたい。国際平和推進部の支援により広島市立大学で海外の若手の研究者を3か月ほど広島に呼んで勉強してもらうというプログラムを始めることができた。今回は韓国から研究者が来たが、八丁堀の映画館でよく映画を見たと言っていた。広島市立大学の先生が個別にいくつか案内もしたが、もう少しシステムチックに若手の研究者やジャーナリストといったコアとなるような人を2日でも3日でも良いので、受け入れるプログラムがあれば、まずそこに行って勉強してもらい、発表してもらうという工程が組みやすいと思った。まずは、深掘りという観点でコアを育てるということをやっていき、例えば、毎年5名であっても10年で50名と増えていくので、それを期待したい。

G7広島サミットを契機とした取組を紹介されているが、これは非常にインパクトが大きい。今回の広島でのサミットの特徴はいろいろあるが、ピースツーリズムとの関係では、政府の行事ではあつたが市や市民が協力して実施できたのが良かったと思う。個人的な関心になるが、サミットでの取組をデータで保存し、利用できるようにしてほしい。市民活動の視点からも国際政治の観点からも重要なテーマなので、広島の事例を俯瞰して利用できる体制を作ってもらえると重要なサンプルとして活用できるの

ではないかと思う。ツーリズムというよりは、研究的な観点になるが是非お願いしたいと思った。

国内ジャーナリスト研修の中で、「まちの小さいところにも被爆の跡が残っていることを学んだ。」というのが個人的に好きでとても印象的だった。幟町小学校の平和資料室は事前の予約が必要であり、学校の先生も大変であろうが、是非ここに加えてほしいと思った。原爆の子の像だけを見る人が多いと思うが、リピーターをターゲットに置くと、幟町小学校は禎子さんの話と繋がるので、こういった小さい所を複数巡ることで点と点が繋がってストーリーができてくると思う。次回は、そういった企画を入れてもらえるとうれしいと思った。

次は、かなり難しい話だろうと思うが、ピースツーリズムの写真や動画に関して、ドローンでの撮影が利用できないか知りたい。平和記念公園は難しいと思うが、平和の軸線を上空から見ると分かりやすいと思う。これまでは、被爆建物の話であれば、戦前の写真、被爆時、復興、現在と4つの時点で考えられていたと思うが、必要に応じてドローンによる空撮を市の方で進めてもらい、利用させてもらえるというところまで活用できる。

(瑠璃委員)

一昨年、観光政策部との共同研究で、広島の実相と記憶や現在の魅力に関する「深掘りしたいリピーター」が秘める、再訪・連泊・グループで訪問に係る大きな可能性と課題について報告させて頂いたが、それを早速様々な方面で取り入れて素晴らしい活動をされており、励まされる思いがした。

各取組について、簡単にコメントしたい。

まず、G7広島サミットを契機とした新たな取組として、国際メディアセンターでのパネル展示とルートマップの配布をしたということであるが、どのようにパネル展示をしていたのか、どのような方々から、パネル展示やルートマップの配布に対して質問やコメントがあったのか知りたい。というのも、広島ピースツーリズムのWEBサイトのアクセス数が増えたということだが、パネル展示の何がアクセス数増加に繋がったのか、またそれは日本国内からのアクセス数なのか、海外の方のアクセス数なのかを知ることによって、今後の国内外の活動に反映していくことができるかと思う。

メディア関係者等を対象とした映画の上映会について、「8時15分 ヒロシマ 父から娘へ」は、広島大学で2回上映したところ、反響が大きかった。是非今後、何度も上映してもらいたい。また、映画といえば「この世界の片隅に」の片渕監督には、2021年に広島大学で講演いただいたが、対談なども上手な方なので、映画の参考になった森富茂雄さんの画集と絡めて、広島に関する映画とツーリズムのイベントも開催できるのではないかと。それから現在、佐伯区内11の公民館で、5月から森富茂雄さんの巡回展示会を開催しており、大きな反響がある。これらは一例だが、様々なピースツーリズムに関わるイベントを繋げて、小規模でも、常に何かが開催されている状態を持続することが、観光には大切である。

ジャーナリスト研修について、今年は私も話をする機会があった。その中で、1面をしっかりと取って広島について書いてくださった新聞社があった。記事はかなり深掘りしており、広島の記憶継承の裾野を広げていく部分にも触れていた。研修の参加者がどのような記事を書いているのか、調べて共有できれば良いと思う。研修で、10名のジャーナリストの方がピースくるで参加され、効率的に広島市内を移動できて、非常に良かったと仰っていた。これを毎年のように続けていくことで、「ジャーナリストの目で見えたピースツーリズム」、「自分で歩いてみた」、「ピースくるを使ってみた」、という記事がどれだけ出てくるのか楽しみである。その中で、平和記念公園外のいろいろなスポットを見てみたが、広島城や中国軍管区司令部跡についてもっと知りたかったという意見が出ていた。これらのスポットにも力を入

れて、定番ルートを是非広げてほしい。

フォトコンテストはここ何年間かで非常に大きく広がってきており、将来が期待される取組かと思う。このフォトコンテストに繋げて、先ほど大芝委員からドローンを使って撮影することができるかという話があったが、是非とも展開していただきたい取組である。広島大学でもドローンを使った撮影により、過去の広島、被爆以前の広島を比較することができないか、歴史について学んでいくことができないかという意見があった。広島市立大学と広島大学が連携して、このような取組を広げていけないかと思っている。

ピースおこは非常におもしろい企画である。一緒に食べるということ自体が交流につながる。広島のピースとは何か、について話し合う場にもなる。外国人でも気軽に参加できる非常に興味深い企画だと思うので、是非広めてほしい。

将来の情報発信ということになるが、どのくらいエアライン（航空会社の機内動画）などで情報発信できているか気になる。最近、日本に向かう主要なエアラインを数社、使う機会があったが、東京や大阪の動画はあっても、残念ながら広島についてのプロモーションビデオを見ることはできなかった。航空機で来日するインバウンドの人数を考えると、機内広告でピースツーリズムを紹介する価値は十分ある。実際、機内で広島について尋ねてきた乗客に出会ったこともある。そういったニーズがあってもプロモーションビデオがないのは残念だ。エアライン上でのプロモーションビデオについて検討してもらいたい。

大芝委員からも話があったが、平和記念資料館の前でたくさんの人々が、話をしたり、周りを見たりしながら、1時間か2時間くらい列を作って待っているという状況がある。待ってもらう時間をおもてなししたり、広島の記憶について紹介したりする機会にできないものだろうか。炎天下の中で持ってきた水を少しずつ飲みながら待つ人も多い。ニーズに応えながら、広島の産物を紹介する機会と捉えて、飲料水を配ったり、待つ辛さを緩和するものを何か配布したり、テントで日陰を作ったり、いろいろなことができるかと思う。また、広島県原爆被害者団体協議会等の碑巡りのガイドをされている団体と連携しながら、待ち時間に碑について学ぶこともできるかと思う。さらに、特定非営利活動法人ANT-Hiroshima 等が様々なイベントをされているので、広島滞在中に参加できるイベントの説明資料を配るなど、他にもアイデアがあると思う。平和記念資料館の待ち時間を今後の情報発信の機会として活かすことができるのではないだろうか。

（渡部委員）

I CANによると、今回のG7広島サミットで、世界の人口の約半数に広島という名前が届いたというデータが出ている。しかしG7の内容が届いたわけではないということがとても重要である。世界に届いたのは広島と、もう一つは、平和記念資料館と被爆者だと思う。確かにWEBサイトの月間アクセス数は2倍になっており、喜ばしいことだと思うが、これだけの数字の中で果たして2倍でよいのかという検討も必要だと思う。どういうことが本当に世界の人達に届いているのかを考えながら今後の取組を考える必要がある。

G7広島サミットに対して、C7広島サミットは4月に行い、当日は、青少年センターを拠点に様々な市民社会の取組を発表した。国際メディアセンターに対し、市民社会への対応は、青少年センターの使用にとどまった。このギャップには前回のドイツと比べて驚いたし、世界の市民社会の人達が実態を知らばどのように思うかと懸念している。続けて会見を行ったが、劣悪な環境であった。サーロー節子さんに来ていただいたが、階段しかなかったため、最後は両脇を抱えて上がってもらわないといけな

った。

実際にC 7で発信した様々な政策提言は一切反映されなかった。市民の民主的なプロセス参加が排除されたというのが結論であり、非常に残念だった。一生懸命努力したが、そういうことだったということとをまず申し上げたい。

ピースツーリズムの観点でいくつか申し上げたいのは、フォロワー数が2倍になったことを喜ぶのではなく、もっとできることがあるのではないかということ。メディアの力は非常に大きいですが、海外のメディアが関心を持ったのはG 7広島サミットの本体以上に被爆者だと思う。私の所にもBBC、フランスの公共放送、ドイツの公共放送、そしてアルジャジーラから、あるいはオーストラリアの放送局から接触があったが、彼らが一番知りたかったのは、被爆者のことだった。そういったニーズに対し、被爆者の体調を考えながら対応した。ジャーナリストや若手の研究者が何を知りたいか、広島に来られる理由をしっかりとキャッチして、ニーズに応えられる体制を整える必要がある。そういう意味では、映画の上映会は、本当に良い取組だったと思う。そこで、上映作品をこの2作品にされたのはなぜか、選考のプロセスが知りたい。もっと違った観点から違った作品を上映することがき、その作品が口コミで広がる可能性があったかもしれない。

ジャーナリスト研修について、メディアの方がどのような内容を発信されたかを深堀りの対象にすべきだと思う。ピースツーリズムの講座では、ぴーすくるを使って市内を回ったというのが非常に良かった。特に暑いので自転車が良かったと思う。その中で非常に残念なのが、通信病院の平和資料館に駐輪場が無く、常に開館しているわけではないということ。資料館という名前が付いていたら調べることなく、常に開館しており、ぴーすくるで行けば駐輪できるものと思うのではないかと。さらに、中国軍管区司令部跡は非常に大事な場所であり、そこについての記述があまりにも乏しい、中にも入れない。特別な空間なので中に入れるよう検討してもらいたい。

ぴーすおこについて、なぜ8月に限定するのか、年中開催しても良いのではないかと思います。

今後の取組の中で、G 7の首脳等が訪れた場所について世界の人々の関心は少ないと思う。実際に関心があるのは、平和記念資料館の展示や被爆者の方のお話、どのようにそれが伝承されているかというようなことではないかと思う。そういうことを配信することこそピースツーリズムではないかと思う。

平和をテーマとして活動している各種団体との連携について、小さなイベントや特色のあるイベントについても紹介があるとWEBサイトのアクセス数が増えるのではないかと思います。

海外の方の交通利用を見ているとタクシーはほとんど利用せず、徒歩か公共交通機関が多い。めいぷる～ぷを待っている人を多く見かけたが、めいぷる～ぷのバス停には日陰になるものや待ち時間を表示する電光掲示板がない。こういったことの改善がおもてなしの基礎になると思う。

ドローンについて、鳥の目で見るというのは大変貴重なものであるが、規制している所もあるのでそのあたりを調べた方が良い。平和の軸線について、ひろしまゲートパークには被爆した路面電車の敷石が使用されており、そこに立つと直線状に原爆ドームが見えて大変良いと思うが、残念ながらそこで止まっている。平和の軸線は、グリーンアリーナを越えて、基町小学校の体育館に行き当たっている。基町アパートを建築された先生の明確な意図があるので、そこまで何で繋がっていないのかと思う。基町小学校の中でも平和の軸線を大切にしたいという動きがあると聞いているので、グリーンアリーナ、基町小学校を越えて広がっていけば良いと思う。

(原田座長)

皆さんから様々な意見をいただいた。大芝委員には県外から来られているということで新鮮な意見を

いただいております、瑠璃委員には海外からの状況を様々な形で発言していただいている。委員の中で最初から関わっているのは、渡部委員と前田委員と私だけで、他の方は後から参加された。当初の経緯をお話すると、最初は何からスタートしようかと考える中、自転車に乗って郷土資料館まで行くなどして、ピースツーリズムのルートを検討した。何をしようかというところからスタートし、どんどん回を重ねると結果的に周辺範囲が広がっていき、どこでブレーキをかければ良いのか、どこまでやれば良いのかという議論もあった。そういったことも踏まえた上で、今年度以降の事業展開に関わっていきたいと思っている。

いろいろな提案をいただいた中で、実現できるものがあれば早く進めて行けば良いし、役所の中にもそれぞれ担当があり、難しい部分もあると思うが、セクションを越えて協力して進めて行くことが懇談会に与えられた大きな役目だと思う。先ほど中国軍管区司令部跡の話もあったが、あれは大変な状況があり、今回、国の史跡となるよう文化振興課が頑張っているが、原爆ドームを特別史跡として、普通の史跡と被爆建造物を被爆建造物群として取りまとめて、広島の情報世界遺産群として発展して行けば良いと思っている。

(山藤委員)

様々な意見を聞かせてもらい参考になった。すべて実施するのは難しいと思うが、事務局が取りまとめた内容を見て、対応を検討したい。

ジャーナリスト研修は、あまりお金がかからない割には効果のある事業である。20年くらい続けて参加されている新聞社もある。参加後の報道については、把握しているので、共有させてもらいたい。

平和記念資料館の話があったが、確かにG7広島サミットの後、入館者数が増えている。一番多かったのはリニューアル後の令和元年度であり、175万人が入館した。その年と比較しても6月は112%、7月は114%であり、そのうち、外国人は6月が130%、7月が129%であった。入館者数が増えていることは非常に喜ばしいことだが、待ち時間が課題である。8月は特に行列となったため、せっかく来られても帰られるということがあり、大変残念に思っていた。そういったところは、ピースツーリズムとの連携で、他の施設を見てもらうことや、開館時間を延長することなどにより混雑の緩和を図りたい。また、なるべく行列ができないように対策ができないかと考えている。渡部委員から指摘があったように、他の施設に駐輪場がないなど、アクセスの問題についても課題だと考えており、何らかの対策を検討している。

(中田委員)

この4月から観光の仕事をするにあたって、G7広島サミットや大阪万博といった大きなイベントに際して、どのようにして観光客を広島に呼んでくるかということを考える中で、平和という視点から皆様のお話を聞くことができ大変参考になった。令和2年度にレストハウスの改修に携わらせてもらった際には、被爆者の方の意見や、平和を学習しにどのような方が来られるのかということを勉強させてもらった。今日は、改めて観光と平和の両輪で事業を進めて行く必要があると感じた。また、ピースツーリズムを推進しながら、平和の軸線など様々なストーリーを意識して事業を展開していきたいと思った。

個別具体の回答はこの場ではできないが、次の機会に1つや2つでも展開できたというお話ができるよう、進めて行きたい。

(原田座長)

事務局から補足説明があればお願いしたい。

(事務局)

瑠璃委員から、G 7 広島サミットでのパネル展示とルートマップの配布について、どのようにパネル展示をしていたのか、どのような方々がパネル展示やルートマップの配布に対して質問やコメントされたのか知りたいとの質問があったので、お答えしたい。国際メディアセンターの会場には、平和に関するブースがあり、平和に関する様々な事業を紹介するパネルの1つとして、ピースツーリズムについて紹介するパネルを展示してもらった。ルートマップはパネルの下に置いており、自由に閲覧してもらうような展示だった。その場に常駐していたわけではないので、どのような方が見られたかは把握していないが、その後、会場となった広島県立体育館から、引き続きルートマップを置きたいという連絡があったり、G 7 の時に見たということで、ルートマップを取り寄せられる事業所があったりと、G 7 広島サミット後にルートマップの在庫が一気に減ってしまい、増刷が必要な状況となっている。

続いて、渡部委員から質問のあった映画の上映については、広島フィルム・コミッションが実施したものである。広島フィルム・コミッションは観光政策部が広島観光コンベンションビューローに業務委託し、映画の撮影に係る支援等を行っている。上映作品は、広島フィルム・コミッションが撮影の支援を行った作品の中で比較的新しいものであり、広島の平和に関するものを選定した。

【令和4年度第2回ピースツーリズム推進懇談会の意見のとりまとめについて事務局から説明】

(前田委員)

ピースツーリズムの位置付けについて話したい。懇談会の資料やピースツーリズムのWEBサイトがとてもきれいだという印象がある。きれいなのは良いことだが、広島でピースツーリズムを取り上げる際には、原爆や被爆が根底にあると思う。原爆や戦争に関するより深い理解に繋がるものであってほしいと思っている。ピースツーリズムのWEBサイトでは、各施設に関する紹介があり、被害について触れられているが、どれもきれいである。以前の懇談会で、「今頃は平和に関する活動で食べられる様になっているのはすごい進歩だと思う」と言ったときに、被爆者団体におられる方からその様なことを言ってもらえるのかと、とても驚かれたことがある。平和を生業とすることを否定していないし、平和が美しいことを否定しないが、きれいで終わるのではいけない。原爆や戦争のことを知る人が減ってきており、それに対する理解や認識が薄くなっていくことを危惧している。広島におけるピースツーリズムの中には、平和や核兵器による被害、あるいは、都市が破壊され、たくさんの人が亡くなるということに対する理解に繋がるものがあってほしい。ピースツーリズムのWEBサイトに、そこまで載せるのは抵抗があるかもしれないが、深い部分が分かるようなピースツーリズムであってほしいと思っている。より高い関心やより深い理解に繋がっていくようなものであってほしい。具体的な被害について検索しても、ピースツーリズムのWEBサイトですぐに分かるようになっていない。平和記念資料館のページに飛んでも出てこない。広島における原爆の被害の概要（被害エリア、当時広島にいた人の数・年末までの死者数、続く苦しみなど）が直接的に分かるようになっていても良いのではないかなと思う。

(原田座長)

私の思いは、前田委員に言ってもらった。厳しい言い方かもしれないが、あの当時の惨状を思い出し

てみれば、今の平和記念資料館の展示では極めて不十分だと言わざるを得ない。14万人の市民が亡くなったわけで、その1人1人の市民がどのように亡くなったか、そこは想像するしかない。私どもが体験したことを平和記念資料館の中に作り上げたら、作りものでしかないかもしれないが、私を含めあの当時を体験した人は中に入れないと思う。今の資料館の展示で衝撃を受けるといっているのであれば、原爆被爆の惨状が相手に伝わっていないのではないかと言わざるを得ない。少なくとも被爆体験を原点として、どこまで表現するのか、どこまで踏み込んで行くのかは資料館としても考える必要がある。

この前、パールハーバーの件があり、取材を何件か受けた。親族が殺された方の中にはアメリカが憎いとはっきり言う方もいる。それをどこまで表現するかというのも考えないといけない。

G7広島サミットは無事に終わったが、これで良かったのか反省する場があっても良いのではないかと、終わっておしまいにするのではなく、今後、皆さんの意見も踏まえて議論していきたい。

(畠崎委員)

先程の話を聞いて、平和の軸線というのが海外の方や若い方にとって非常に強い印象があると感じた。広島商工会議所の隣に平和の軸線の石畳が敷かれた。平和の軸線は基町小学校まで伸びており、反対側は、瀬戸内海に抜けている。ドライブ・マイ・カーを誘致する決め手も平和の軸線に込められた思いがあると聞いており、平和の軸線は広島市民の思いの深さを伝えるものだった。

そして、人々を惹きつけるためには、絶対に行きたくするようなストーリーが重要である。例えば、レストハウスについて、「この世界の片隅に」を見たとき、一番初めに当時の大正屋呉服店、現在のレストハウスが描かれていてとても驚いた。これは、呉だけの映画ではなく広島についても描かれたものだという、片渕監督の思いからであると聞いている。レストハウスではその部分を映像として紹介しており、素晴らしいと思う。全て記憶で描かれた森富さんの絵だとか、片渕監督のアニメで使われた絵をレストハウスで展示したら良いのではないかと。

通訳ガイドで若い方に伝えているのは、外国の方に通訳するのに、過去形で話すのではなく、現在進行形で話さないと相手に伝わらないということである。過去と今が繋がっているということ話をすることで、初めて相手の気持ちに繋がると思う。今の外国の方は、あまりにも惨たらしい事実と直面することはできないと思うが、彼らには、想像する力があると思う。被爆直前の幸せそうな写真を見ると、その後何が起こったのか、どんなに惨く亡くなったのかを想像することができる。その手法を取っているのが「この世界の片隅に」だと思っている。

最後に、平和記念資料館の待ち時間をなくすることが大事だと聞いて安心した。20分以上待たせるといことを続けると、今後ボディブローのように効いてくるのではないかと。見学するのに1時間以上待たないといけない施設は、ずっと高い入館者数の水準を保つとは考えられない。そのため、待ち時間の解消について検討していると聞いて、本当にほっとした。

(大芝委員)

待つということに関して、畠崎委員と同感である。一般的に待つということは、ニーズがあるということで、それだけ訴えるものがあるのだと思う。それに対応していくのが広島の使命だと思う。

そして、前田委員と原田座長からの指摘は非常に根源的な話だと感じた。ピースツーリズムの推進について、私はやや手段的な方向に向いていたが、何のためのピースツーリズムなのかという根源的な目的を見失わないようにしたいと感じた。しかし、そういった話をピースツーリズムの中に含めてしまうのが適切かどうか、考える余地があるかもしれない。被爆の記憶、原爆の悲惨さ、戦争がどれだけ残酷

なものであるのかということについて、一義的には、私の所属する広島平和研究所の責任であると感じた。うちに限らず、広島大学も含め、研究者は根源的なところである「何のため」を見失わないようにしないといけないと思った。

配布された広島市豪雨災害伝承館のパンフレットについて、原爆で家族を失う、友人を失う、その場を見るという体験は、形は違うが、ある程度被災者においても言えることだと思う。身内を亡くすという意味で、少なくとも心情的な部分はある程度共有できるのではないかな。言い方を変えると、被災地が広島に求めているところがあると思う。他の被災地の方々に、広島の人がその後どのように生きてきたのか、その生き様を広島の人が伝えていくというのが求められているのではないかなと思う。

(瑠璃委員)

委員の皆さんが言われた様に、実相を伝えるというのはピースツーリズムのコアになる部分だと思う。ピースツーリズムのサイトが美しいという話があったが、樹木を大切にし、緑豊かで水のきれいな広島というのは復興の象徴になっており、その部分を皆さんに見てもらっている。そういった光の部分海外の人も国内の人も見たいと思うと同時に、やはり影の部分、つまり、広島が何をメッセージとして伝えているのかを知りたいから広島に来るのではないかなと考える。つまり、壮絶な被爆体験と戦後の苦難の時期を乗り越えてきた経験が、広島の特徴であり、宝である。私達は観光というと、美しい、楽しいを売りに出さなければ、人々は興味を持たないのではないかな、と思いがちであるが、そうではない。実はメディア研究の観点から申し上げると、新聞でもニュースでも人間の生死に関わる部分というのを、人は読みたがるということが、研究で明らかになってきている。広島や長崎に関してなぜ人々が興味を持つかというのは、やはり被爆体験、原爆体験によるところが大きい。例えば以前報告したトリップアドバイザーの研究をしても、G7広島サミット前後で来られた方のインタビューデータなどを見ても、来広と再訪の理由には、被爆の実相について知りたい、被爆者に実際に会いたい、被爆後の暮らしについて聞きたいという要因が大きかった。だから、広島の被爆体験という部分を観光で前面に押し出すのを恐れてはいけない。むしろ、それがあからこそ、人々は広島に来たいという動機を持つと思う。広島の体現した原爆・被爆の実相を伝えながら、同時に美しい広島、楽しい広島、美味しい広島、という側面を売り出していくことで、本質的な深みが生まれる。そのようにして、唯一無二の広島について情報発信してほしい。

渡部委員から映画の上映作品について、非常に重要な問いかけがあり、それについては事務局から理由を説明してもらったが、これに関して、映像文化ライブラリーを活用できるのではないかなと思った。いろいろな作品が活用されないままになっているので、ピースツーリズムで活用できないかな。レストハウスで上映するという方法もあるかもしれないし、新しくできたゲートパークプラザのどこかに一室を作り、チケットをもらって平和記念資料館に入館するまでの待ち時間を活用して映像を見るようなこともできるのではないかな。その中に、被爆の実相を伝える被爆証言のビデオや、今後作るPR動画を見せることもできるのではないかな。そういった既にある広島市の素晴らしい映像等を最大限に使用し、あの日とその後について学ぶ機会を市民と来広者が享受できないだろうか。その上で、現代の広島の楽しさの価値を改めて感じる事ができよう。痛みと喜びの両方を伝えるピースツーリズムができれば良いと思う。

私たちはこれまで、発信という言葉に重きを置いてきたが、発信して終わりではなく、反応を調べるということに、もう少し力を入れても良いのではないかなと思う。例えば、わかりやすいアンケートを作成し、QRコードでアクセスし、各観光スポットやイベントで、訪問者には質問に答えてもらうように

すれば良いと思う。先述の平和記念資料館の待ち時間に質問に答えてもらうような仕組み作りができれば良い。多言語で設定すれば、海外からの訪問者にも、質問に答えてもらいやすく、ピースツーリズム推進懇談会や、広島市の企画に役立つ生の声が得やすい。

(渡部委員)

私が今一番心配しているのが、和解、許し、未来志向という3つの言葉である。これがあまりにも軽々しく語られ過ぎている。パールハーバーとの姉妹公園協定について、中国新聞に意見を書かせてもらった。非常に残念だったのは、エマニュエル駐日大使のコメントが新聞記事に掲載され、これからは、「和解、未来志向」、だと語られたとのことだが、本当にそうだろうか。それについて広島市は明確に答えるべきではなかったのだろうかと考えているが、皆さん御存知の経緯でほとんど市民や市議会の討論もなく、調印されたという事実がある。もしかしたら、そういったことが、先程前田委員が言われたことと重なっているかもしれないと思いながら話を聞かせてもらった。失ったものは二度と帰らない、だから失わないようにしないとイケないということが大事ではないかと感じている。どういう風な失い方をしたのか、どういう経緯で失うようなことを自分達が招き入れてしまったのかということを考えることが大事である。

平和記念資料館に関して、リニューアルしたからそれで良いというのではなく、平和記念資料館を訪ねた人が心に留めて、そして自分自身のこととして、考え続けてもらえるようになっているだろうかとか常に検証をしないとイケない。

平和記念資料館の待ち時間は、忍耐強く待ってもらっていて申し訳ないと思っている。広島に来られた貴重な時間を待つことで費やしたかもったいないし、申し訳ないと思っている。一期一会の出会いのように平和記念資料館に来られる海外の方もたくさんおられる。これについて、実はできることがたくさんあるのではないかなと思う。できることがあるのに、できることに着手していないという現実があるように思う。どうしたら良いかみんなで知恵を出し合って、一つずつ形にできたら良いと思う。私が一番申し上げたかったのがこのことである。

(山藤委員)

実相をいかに伝えてくのかということ平和の部門としても全職員持っているもので、足りない部分もあるかなと思うが、様々な意見をいただいたので、しっかりと戻って伝え、改めて考えていきたいと思う。引き続き御指導、御意見をお願いしたい。

(中田委員)

貴重な意見をいただきありがたく思っている。いただいた意見は事務局でまとめるが、平和記念公園とパールハーバー国立記念公園との間で締結された姉妹公園協定など、我々の所管ではなく、全てにお答えすることが難しい部分もあるが、次回の懇談会までに状況並びに今後の展開が分かるものについては、きちんと整理してお伝えしたい。

(原田座長)

最後にまとめを整理してお伝えしたい。御存知の方もおられるかもしれないが、広島市現代美術館と広島城、平和記念資料館とで3館の割引共通券を出したらどうかと、議論したことがあり、やろうかということになったが、現代美術館の長期休館が決まり、途中で頓挫してしまった。これをどういった格

好で始めるかを議論しないといけないと思う。

以前、平和記念資料館から現代美術館への無料バスを出したことがある。当時は、今ほど混雑していたわけではないが、入館者の一部でも、現代美術館の方に足を運んでもらいたいとの思いで無料バスを2年間運行した。それなりの成果はあったので、それも一つの方法ではないかと思う。なぜそういった話に結び付くかという、めいぷる〜ぷのコースは30分に1本だったが、現代美術館は乗降者が極めて少ないので、1時間に1本に減便された。もちろん、それにどう対応するかというのは現代美術館で考えないといけない。現在開催中の特別展の中身は、まさに広島市が進める平和文化そのものではないかと思う。この懇談会で議論したのは、非常に狭い意味の平和ではなく、文化を含む広義の意味の平和であり、ここに来てその取組が広がっている。こうした契機をとらえ、平和記念資料館と現代美術館はより一層連携を進めてほしい。

次に、前回十分に議論できなかったが、拠点施設をどうするかという大きな課題が残っている。拠点施設というのは何かと言うと、市民と来訪者との接点の場である。その接点の場というのは、わざわざ大きなものを作るというのではなく、ちょっとしたデスクと椅子、すぐ近くにトイレがあれば良いのであって、旗1本しか掲げられないかもしれないが、来訪者と市民との接点の場を作るべきではないか。平和大通りの整備の問題もあるので、そういった取組もできるのではないか。

なかなかこの場では、文化の関係の意見交換ができていないが、必要に応じて関係職員に参加してもらおうという方法もあるのではないかと思う。

いろいろな意味で課題はあるが、そういった中で今後どう進めていくべきか、今日いただいた議論を中心に、更に発展的に進めていきたいと思っている。委員の皆さんの御協力をお願いしたい。